「聖なる母子」

1959～61年ごろ、油彩、カンバス
53・0㌢×45・5㌢（青木純子氏寄贈）

鈴木　満（1913～75年）

鈴木満が病身も顧みず欧州へと旅立ったのは1968年3月のことでした。2カ月後には、妻と義妹を先に帰国させます。それから一人、パリに暮らし、各地で取材、研究を続けるのでした。帰国したのは翌年の秋。アトリエにこもる日々を送ります。晩年は、いてつく街角に憂いを帯びた表情でたたずむ母子像を次々と生み出し、独自の作風を確立させました。71年には向井潤吉の後押しもあり、58歳にして初個展を開催しています。

鈴木は、本作において自らの聖母子像をつくりあげました。厳かで重々しくも体温を伝えるかの画肌に晩年期の源流を見るようです。

画家亡きアトリエを訪ね、スケッチブックから挿絵に至るまで何百という鈴木の遺作を手にとった初代館長・大川栄二は、当館での回顧展によせて次のように記しています。「画面の中に作者の詩魂、生きる悲しみ慈しみが、孤独と哀愁となって塗りこめられていた」（小此木）

《名画の扉》

大川美術館企画展「大川栄二生誕100年記念　コレクターの目」から